

九州に於ける銅鐸

中山, 平次郎

<https://doi.org/10.15017/2344466>

出版情報 : 史淵. 1, pp.41-50, 1929-11-28. 九州帝国大学法文学部
バージョン :
権利関係 :

九州に於ける銅鐸

昭和四年五月廿六日九大史學會夜會に於て演述

醫學博士 中山平次郎

銅鐸は從來安藝安佐郡福木村福田木ノ宗山(邑智郡中野村假屋及び那賀郡上府村城山鍛冶床)以西からは未だ發見されたことが無いといはれ、隨つて九州はその分布圏外と看做され、この方面にはその所有者さへ無いやうに思はれて居たが最近私は二口の銅鐸を實見するの幸を得たから、茲にこれを紹介して考古學上疑問の餘地多大なる此種遺物研究の參考に供したいと考へる。久しい以前に肥後國鹿本郡内村字平田に於て銅鐸を發見した由を報じた人があつて、このことは吉田東伍博士の大日本地名辭書にも記載されてあるが、これは實は銅鐸の如何なるものであるかを知らぬ人の間違つた報告であつた。故若林勝邦氏が九州出張の際にその實物を見られると、案外これが銅鐸で無くして鰐口であつたといふことである。爾來

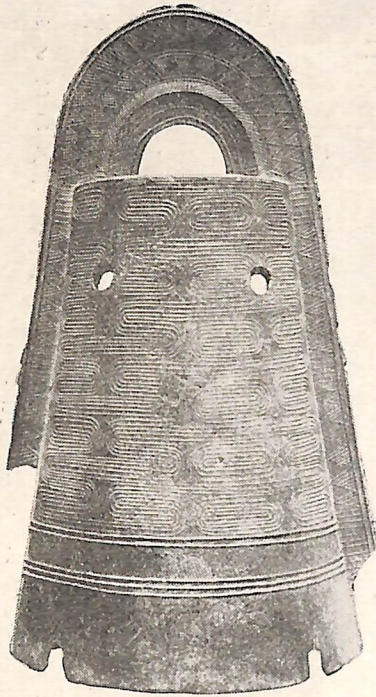
九州から銅鐸を發掘した報に接したことが無く、又その所藏者にも出遭はなんだが最近終にその二口を見るを得たのである。斯の如く従前學界に知られて居らなんだ銅鐸が二つも近く相次で現はれて來たのを以て考へると九州方面には尙他にもこれがありはせぬかと思はれ、場合によると九州も亦將來銅鐸の分布圈内と看做さるゝ日が來らぬとも限らぬやうに推察さるゝのである。近時私の見た二口の銅鐸は未だ以てその來歴が明瞭で無いから、このものに徴して直ちに分布圏を九州にまで擴めることは出來ぬにしても、その望が全然無い譯では無いやうに思はれ、更に進んで十分に搜索して見る必要を認めるのである。尙最近實見の銅鐸に關して頗る有益に感じたのは、その一口のものが陽鑄の銘文を有することである。銅鐸に有銘のものが無いとは從來一般考古學者の承認し來つたところであるが、今回愈々有銘のものが出現して來たのであつて、甚だ稀には銘文を有するものあることを認めねばならなくなつたのである。この事實は銅鐸問題研究上に影響するところ甚だ大であつて、この有銘銅鐸に徴してこの遺物に關係ある古代民族が古く日本に渡來した支那民族であつたことの事實的證明が擧げられたやうに思ふのである。私は過

般各方面の學者にこの有銘銅鐸の寫眞を御送して置いたが、本月(五月)開催の考古學會大會に際して喜田貞吉博士は是等を參考されて銅鐸に關する最新説を發表せらるゝところがあり、これに對して諸學者よりも討論せらるゝところがあつたやうに承つて居る。孰れ是等の詳細は近き將來に於て雜誌上に公表せらるゝことであらうから、一應諸學者の高見を拜讀した上私も亦この銅鐸問題に就て熟考して見やうと樂んで居るのである。随つて今夕はこの問題に就ては別に愚見を開陳しやうと思はぬ。唯近時見た二口の銅鐸を御紹介するに止めて置かうと思ふのである。

深見平次郎氏藏有銘銅鐸

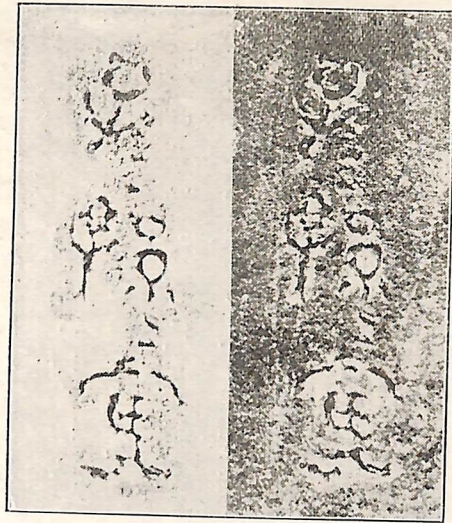
この銅鐸は、本年四月上旬福岡市川端町の新保喜三氏が佐賀の骨董商から購入されたものであつて、後に至つて深見氏の有に歸し、今、柳町稻荷橋畔の同氏控宅に置かれてある。平戸から出て長崎へ行つて居たものとのことである。若しこれが平戸出土のものであつたならば、愈々九州からも銅鐸が出たことになり、分布圏を擴めて可いことになるのであるから、一度この間の事情を十分に調査して置きたく希望して居るが、まだその運びに至らぬのである。新保氏の談話に徴すると、購入當時は眞

黒に汚れ、發掘後二百年位は世に傳つた様子であつたといふから、發見は随分久しい以前にあつたらしく、出土状態杯は今日より之を明にし難いかも知れぬが、切めて何時頃、何處から出土したか位のことは、之を確めて置きたく思ふ。現在の状態としては、この汚れも巧に洗ひ去られ、全體に亘つて鮮綠色の錆を現はし、部分に依つては、黒味を帯びた光澤ある面を示して居る。表面の處々に雲母の細片が固着して居ることから察すると、或は元來砂地の如き部位に埋没して居たものでは無いかと思はれる。



銅鐸は寫眞を以て圖示する如き流水紋式に屬する中型の品であつて、現存部の總長は一尺八寸餘である。元來九ヶ所鈕に三ヶ所、左右の鑿に各三ヶ所施に飾耳を有した痕跡を存して居るが、今一ヶ所も完存せるものが無

同上銅鐸銘文（内面にあり）



眞に就て一見を乞ふこととして茲には省略しようと思ふ。各部の性状及び紋様等から觀察して、この銅鐸には少しも疑はしき箇條を認めぬのである。

この銅鐸に於て特に注意を喚起するのは、これが銘文を有することである。銘は鐸身一側の内面正中線のところにあつて、文字は「子々孫々寶」と訓まれる。最下の文

字は鑄出不完全、確に「寶」とも稱し難いが、字形から推察すると、左文になつた「寶」と解するのが妥當のやうである。上出の圖中、右側のものは有銘部（内面にあつて直ちに撮影し難きに因り、鏡像を撮影したる後更に之を反轉せり）の寫眞、又左側のものはその拓本である。若しこの銘文が陰刻のものであるならば、後世から追加可能のものと、果して鑄造の時からあつたものであるや疑問を生ずべきであるが、以上の銘文は拓本からも知らるゝ如く陽鑄であつて、後世から追加不可能の状態にあるから、その心配は少しも無いのである。最初からあつた事は明白、銅鐸そのものに疑はしい點が無いといふならば、この銘文も疑はしき點が無いと認定せねばならぬ。喜田博士からの私信に依ると、この銘文を以て漆で書いたものといはれた人があつたといふが、決して然るもので無いのは特にいふ迄も無きことである。折角有銘の銅鐸を見出したとしても、これが刻銘であつたならば、定めし異論百出したであらうと推察されるが、以上の銘文が陽鑄であつたことは研究上頗る好都合であつたといはねばならぬ。この有銘銅鐸が発見されて以來、従前發見の銅鐸に就てその内面が検査されるやうになつたが、他にはまだ斯る有銘銅鐸の見出された事を聞かぬのである。

崇福寺藏銅鐸同寺の所謂寶鐸香爐

以上の有銘銅鐸が一時知人T N氏の手許にあつたことがあり、或る日私はその一部の拓本を取らんが爲に同氏を訪問し、此際氏の口から圖らず崇福寺に尙一口の銅鐸があることを聞出した。氏はこれを同寺の茶席に於て見られたといふことであつて、先住の渡邊玄外老師にその來歴を尋ねられたところ、我醫學部の位置(舊時崇福寺の地所)から病院建築の際に發掘したと答へられた由である。これを正確とする。と明治二十六年頃の發掘と思はれ、その實物さへ確め得れば愈々九州からも銅鐸が出て居ると信じて可いことになるのであるから、早速同寺を尋ねて見ると、何人も斯る鐸を知らぬといはれるのに困つたのである。仍て寫眞に就て種々説明するところがあり、又茶事に關係した人々を煩はして諸方を尋ねて貰つたが、今以て病院の位置から出た銅鐸なるものゝ所在は不明、T N氏以外には斯る鐸を見たといふ人にさへ出遭はぬのである。渡邊玄外老師さへ健在ならば、斯かる銅鐸の有無を容易く確め能ふが、何分老師は昨年物故された爲に、これを確めんとする途が無く、この方の搜索は今尙行き患んで居るのである。

以上の銅鐸は急にこれを見出すことが覺束無いやうであつたから、搜索を一時見合す積りで同寺に挨拶に行つたところ、此際寺僧から開山忌専用の寶鐸香爐なるものがあることを聞いた。故に念の爲にこの香爐を寶藏から出して貰ふと、これは疑も無く銅鐸を利用したものであり、鈕部を除き去つて孔や凹入を塞ぎ、器を倒にして灰を盛つて香爐としたものであつた。この香爐を見出したとき、私はこれを以て醫學部の位置から出たものと考へたから、早速その寫眞を焼き附けてこれをTN氏に示して尋ねると、氏は言下にこれでは無いといはれるのに驚いたのである。その言ふところに随ふと、氏の見られた銅鐸はこの香爐より少しく小形であり、鈕部に破損があつたがその一部はまだ残存し、身部の紋様もこの香爐のもの程に明瞭で無く、尙底部にも多少の破損があつて他物を以て支持せぬと直立せぬ品であり、普通の銅鐸の如くに底部を下にして立て、あり倒にして灰を盛つたものでは無かつたといふ。多くの點に就て寶鐸香爐はTN氏の記憶に存する銅鐸と符合せぬのであつて、兩者が別物であるらしく思はれて來たのである。仍て更に同寺を訪問して寶鐸香爐の來歴を尋ねて見ると、何時代から同寺にあるや不明であるが、久しく開山忌に使用し

來つた品であつて、この香爐には特に製した鑄物の臺があるといはるゝのである。そこで、この臺を見せて貰ふと、その刻銘及び箱書に徴してこれが安政年間熊谷又七なる人によつて寄進されて居ることが知れて來た。隨つて寶鐸香爐は既に少くとも、安政年間から同寺にあつたことが明白であつて、決して明治廿六年頃の發掘物であるべき道理無きことになつて來た。



崇福寺藏銅鐸(所謂寶爐香爐)

に至らぬが、これによつて圖らず崇福寺に一口の銅鐸が香爐として利用されて居る

を知つたから、その來歴を知ることあらんと臺の寄進者たる熊谷又七氏の子孫を捜索し、その子息に當る才吉氏なる老人が幸に健在であることを聞出したから、訪問して尋ねて見ると、恰も安政頃の崇福寺住職に藍陵なる人があり、熊谷氏の親類であつたから、又七氏の寄進も恐らく斯かる緣故に依つたものであらうといふ外、別に寶鑄香爐に關しては知るどころが無かつた。斯くして病院の位置から發掘された銅鐸なるものゝ行衛も亦寶鑄香爐の來歴も、ともに調査不成功に終つたが、崇福寺に學界未知の一口の銅鐸が傳存して居ることのみは確實である。

この香爐の銅鐸は、圖示する如き袈裟襴式に屬する中型の品であつて、長さ一尺許なる鐸身部のみ完存し、鈕部は全然除去されて居る。圖に白く見える部は美麗なる鮮綠色の鍍を帯びたる部分、又黒く見える部は黒味を有して光澤を放てる部分である。裏面の方にも同様の袈裟襴紋様を有するが甚だ不鮮明である。底部に近き内面に一條の帶狀突出を有することは他の銅鐸に於けると同様であつて、この方には銘文杯を見ぬ。今後も尙九州方面に銅鐸の有無を搜索して見ようと思ふが、幸にこれを發見し得たならば再び本會に提示することゝしよう。